

蠟燭の科學

市川 浩

本年も早や師走を迎ふ。丸二年に及ぶ新型コロナナとの戦ひに於て、我が國は少くとも疫學的、醫學的には、全世界に誇り得る成果を上げ得たりと言ふべし。諸外國は之を日本要因ジャパンファクターエックスと名づけて我が國共々之を説明せむとするも、未だ的確なる結論得られずと云々。現在オミクロン型の感染の初期とて警戒中の所、日本要因Xへの素人的見解など表明すべくも非ざれば、これ以上の言及を延期す。

されど毎日の電視視聽を通じて別の感懷あり。その一つに専門家の解説あり。極言せばコロナなかりせば、その警咳に接する能はざる斯界の泰斗に電視畫面を通じて、間近に御話頂くこと、洵に有難く感ず。慾を言はば當該ウイルスの發生、増加など、現代科學の理論的立場より御指導賜らば幸ひ更なり。何とならば我等中高年者は醫療のみならず、電算、宇宙などに就きても基礎理論の受講經驗乏しく、その齎す人類への影響に就き、全くの想像力無ければなり。

歐米に於ては十九世紀中葉産業革命の最中、偉大なる科學者マイケル・ファラデーは「若者達へのクリスマス講演會」を千八百二十六年より同六十年（本邦安政七年）まで開催續け、その最終講演は「蠟燭の科學」とて知らる。この講演を聞きたる英國の若き英才は科學のありやうを自らの腦裏に正確に燒付け、その傳統は今日なほ健在と見ゆ。即ちファラデーの最大の功績は、科學とは人間の感性により理解可能なるを英國民のみならず世界の若人に確信せしめたるに非ずや。かくて英國は産業革命の主導權を得、今日なほ世界に對し強大なる發言權を有す。

我が國は科學立國を標榜して戦後久しきも、最近は氣になる事象とも言ふべき多からずや。先日日本人初の一般人宇宙旅行に成功す。目出度きことなれど、宇宙への打上げより地球への歸還まで全て外國機、外國施設、外國運航に御委せにて莫大の「旅費」は一圓も我が國には還流せず、期待を後世に願はざるべからず。

又我が政府デジタル化促進に注力すと雖も、コロナ対策の一環とて、ワクチン接種の追跡にマイナンバーを利用せんとす。されどこれは稅務に特化せるシステムにして、今後ワクチン以外の膨大なる醫療データの處理用には別途の設計を要すべく、始めより稅務、醫療共用の設計に比し、運用、守秘兩面の困難を招くに非ずや。

一方に於て、高齢化社會に於ける高齢者の役割として「語り繼ぐ」ことありと雖も、特に思ひ浮ばざるを如何せむ。漸く今回のコロナ事案にて、惡玉に祭り上げられつる酒家、酒

席にての歡談に就き、一考を得たり。今日酒席は一般に狭き卓を圍み大聲にての會話を想像せしむるも、曾ては圍爐を始めとして廣座敷の宴會に至るまで酒は靜かに飲むべく、部屋の壁に沿ひて一列に着席の光景を想起す。次々に運ばるゝ料理を靜かに頂き、時折舞妓さんの舞踊等演奏せらるれば、しばし食事を中斷す。やがて主客、主人等座を降り、列座の参加者と個別の歡談始むるに至りて稍無禮講に趨くも、周り一列は然まで亂れず残る。この趣旨を實現せば、營業の停止も避け得られたるに非ずや。かゝる作法は曾ては年長者から若者へ、先輩から後輩へと傳ふるを以て、文化の特性を有しけり。

(令和三年十二月三日受附)